

英国小説のキャノンと帝国 ——『嵐が丘』の場合

坂 田 薫 子

序

エドワード・サイード (Edward W. Said) の著作『オリエンタリズム』 (*Orientalism*, 1978) を契機に、1970年代後半から、文学批評の一つの形態としてのポストコロニアル批評が注目されるようになり、それ以降、それまではコロニアリズム (植民地主義) やインペリアリズム (帝国主義) とは無縁と考えられてきた文学という知的領分の中にも、植民地支配を正当化する言説を見出そうとする批評活動が盛んに行われている。特にサイードの『文化と帝国主義』 (*Culture and Imperialism*, 1993) に触発されるかのように、次々と英国小説のキャノン (正典) にもポストコロニアル批評のメスが入れられ、様々な議論が行われている。

そこで本論文では、ヴィクトリア朝の小説『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) を取り上げ、英国小説の正典と見なされているこの作品にどのように大英帝国が表象されているのかを再確認した上で、ポストコロニアル批評が、この作品の抱える諸問題にどのような回答を与えうるかを考察してみたい。

1. 『嵐が丘』の疑問

エミリー・ブロンテ (Emily Brontë) の『嵐が丘』が英国小説の正典の一つとして数え上げられ、英文学史のテキストとしても欠かすことができないものとなっているのは、その作品内に見出せる、ロマン派文学的要素とヴィクトリア朝文学的要素の明らかな二面性と、その二面性を生み出している物語の語りの構造の緻密さに拠るところが大きいと言われている¹⁾。

この作品はまず、二十代から三十代と思われる都会出身の厭世家、ロックウッド (Lockwood) の日記 (旅行記) の形で始まる。彼は自分が借りた屋敷、スラッシュクロス・グレンジ (Thrushcross Grange) で聞かされた話を綴っている。その話をロックウッドに語って聞かせているのは、アーンショー (Earnshaw) 家とリントン (Linton) 家に仕えたネリー・ディーン (Nelly Dean) である。ここに、全知全能の神のようなナレーターや、作者の声が入り込む隙はないように思われる。第一世代のキャサリン・アーンショー (Catherine Earnshaw) とヒースクリフ (Heathcliff) の結び付きを否定し、第二世代のキャサリン・リントン (Catherine Linton) とヘアトン

(Hareton Earnshaw) の結び付きをよしとするのは、常識を振りかざす、ヴィクトリア朝文明の体現者のようなネリーであり、他方、第一世代の結び付きにロマンを掻き立てられ、想像を膨らませるのはロックウッドであって、決して作者であるようには思われない。二つの世代の結び付きのどちらを作者ブロンテが理想としていたのか、見極めるのは困難であり、この点が『嵐が丘』を巡る批評を難しくしている原因の一つでもある。読者は主観的な価値判断を挿入して物語を語る二重、三重の語りの構造を崩した上で、二世代の恋愛の意味を解釈しなければならない。

この作品の魅力の一つであるが、しかし、読者に決して完全なる理解を許さないのが、第一世代のキャサリンとヒースクリフの間に存在する「愛」の形である。キャサリンはなぜヒースクリフを愛していると公言しておきながら、彼との性的な男女愛を受け入れることがなかったのか。キャサリンがヒースクリフに対して抱いていた愛とは何であったのか。未だに研究者の意見が一つにまとまることはない²⁾。

キャサリンとヒースクリフの関係を考える際によく利用されるのは、精神分析批評と、『嵐が丘』をゴシック・ロマンスとして読むジャンル批評である。精神分析批評は、キャサリンとヒースクリフの関係、キャサリンとエドガー・リントン (Edgar Linton) の関係を、単なる男女の結び付き、ロマンスとしてとらえることはせず、キャサリンという人間の中にある、何ものにも染められずに、生まれたままの本来の自分の姿を留めておきたいという欲望と、経験を積んだ洗練された人間になりたいという欲望の対立、葛藤が生み出しているものと見なす。キャサリンがヒースクリフと離れられないのは、彼が彼女の自我、エゴを象徴しているからであり、他方で彼女がエドガーに惹かれるのは、エドガーが体現する文明に憧れているためである、と分析する³⁾。

キャサリンが自分と二人の男性の関係を説明してみせる第九章の天国のたとえ話は、ヒースクリフを彼女の本質、本能ととらえ、エドガーを教養を得て洗練された彼女の成長した姿ととらえて読んでみると興味深い——“so he shall never know how I love him; and that, not because he's handsome, Nelly, but because he's more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same, and Linton's is as different as a moonbeam from lightning, or frost from fire.” (80)。ヒースクリフがキャサリンの魂の表象であるならば、たとえエドガーと結婚しても、生きている限り、自分はヒースクリフと離れることはないというキャサリンの主張にも納得がいくようになる。

“I cannot express it; but surely you and every body have a notion that there is, or should be, an existence of yours beyond you. What were the use of my creation if I were entirely contained here? My great miseries in this world have been Heathcliff's miseries, and I watched and felt each from the beginning; my great thought in living is himself. If all else perished, and *he* remained, I should still continue to be; and, if all else remained, and he were annihilated, the Universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it. My love for Linton is like the foliage in the woods. Time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees—my love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath—a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff—he's always, always in my mind—not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself—but, as my

own being—so, don't talk of our separation again—it is impracticable; and—” (81-82)

そして彼女の魂であるヒースクリフが彼女を責めれば、当然キャサリンの精神は病んでいき、死を迎えても不思議はなくなるのである。

その一方で、ゴシック・ロマンスの系譜に沿って『嵐が丘』を解釈し、実はヒースクリフはアーンショー氏の隠し子で、彼とキャサリンは血の繋がった兄妹であり、キャサリンはそのことを知っていたために、彼との性愛を受け入れなかったのだ、という読み方も存在している⁴⁾。確かにこの読解でも、エドガーとは異なり、キャサリンとヒースクリフの間に魂の結び付きがあっても不自然さはなくなる。

これらの読みに対して、最近のポストコロニアル批評は、ヒースクリフが被植民者の血を引く人間であったために、キャサリンは最後まで人種の壁を乗り越えられなかったという読みを新たに提示している。英国小説の中に表象された大英帝国を読み取ろうとするポストコロニアル批評は、サイードによる『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*, 1814) 論や、スピヴァク (Gayatri Chakravorty Spivak) による『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) 論が可能にしたように、『嵐が丘』の難解さを解きほぐすことに貢献してくれる⁵⁾。早くは1987年に、ヘイウッド (Christopher Heywood) が、『嵐が丘』出版当時のヨークシャーの歴史を丁寧に調べた上で、ヒースクリフを当時当地に見られたアフリカ系の元奴隷の表象として読む可能性を論じており、ポストコロニアル批評で『嵐が丘』を読み解こうと試みる多くの批評家が引用している。ただし、ヘイウッドの論文は社会史研究の視点から作品の背景を調べたものであるため、第二章では、『嵐が丘』をポストコロニアル批評で読解した代表的な文学研究論文としてしばしば引用される、マイヤー (Susan Meyer) による『嵐が丘』論を中心に、『嵐が丘』のポストコロニアル批評について簡単にまとめることにする。

2. ポストコロニアル批評

2.1. マイヤーによるポストコロニアル批評

まず、ポストコロニアル批評は、フェミニズム批評やマルクス主義批評が、『ジェイン・エア』のヒロイン、ジェインの挑戦と達成を強調しすぎること、バーサ・メイソン (Bertha Mason) の存在を見えなくしてしまったのと同じ方法で、ヒースクリフを「性差」や「階級差」を超えた存在と見なすことに満足する一方で、「人種上の差」を暗黙のうちに認めてしまっている、という矛盾を追求するところから論を展開していく⁶⁾。

マイヤーのポストコロニアル批評を一言で要約すれば、ヒースクリフの復讐に帝国の逆襲(「リバーズ・インペリアルイズム」)を見出すということになる。マイヤーによれば、ヒースクリフはリントン家を訪問した際、イギリスの帝国主義に由来する人種上の横柄さを示す凝視に晒される。リントン氏は、ヒースクリフをインドの水兵の子か、奴隷貿易で連れて来られた子と見なす。アーンショー氏がヒースクリフを引き取ったとき、もっとまともな地位を彼に与えるつもりだったが、リントン氏の帝国の視線に晒された瞬間、ヒースクリフは劣った人種上の部外者の役割に固定される。ブロンテは骨相学で「暗黒の人種」を制御しようとする十九世紀イギリスの帝国主

義を批判した上で、「野蛮な」部外者の抑圧された力が解放されたらどうなるのかを描いてみせる。マイヤーの読解では、黒い肌を持つヒースクリフは植民地出身を示唆し、イギリスの帝国主義に甘んじ、イギリスの召使いの階級にされている人種の反抗勢力の化身となる。確かに当初はキャサリンの女性の社会的役割への反抗がヒースクリフに投影されているはずであった。しかし物語が進むにつれ、ヒースクリフはそうしたメタファーの境界から抜け出し、彼の怒りは「暗黒の人種」への抑圧への反抗へと変化していく。解放されたヒースクリフのエネルギーは、帝国主義者にとっての最悪の悪夢、逆植民地化として立ち現れる。まずネリーの語るヒースクリフの架空の出自がイギリスの帝国主義に甘んじている国々による逆の植民地化を示唆する。中国とインドが手を組み、イギリスを押さえ込むという現実の歴史と架空の悪夢が仄めかされる。また、ヒースクリフの空白の三年はアメリカの植民地反乱と結び付いている。帰国後のヒースクリフの態度は明らかにイギリス帝国主義の醜い残酷性を真似ている。ヒースクリフは植民地で押さえつけられていたものが戻ってきたことを表象しているのだ。このようにマイヤーは、『嵐が丘』を反帝国主義小説として解釈してみせるのである。

2.2. その他のポストコロニアル批評

マイヤーとはほぼ同時期に発表されたスネイダーン (Maja-Lisa von Sneidern) による『嵐が丘』のポストコロニアル批評がさらに踏み込んだ指摘を行っており、興味深いため、ここで簡単に紹介しておきたい。スネイダーンは、ヒースクリフ、ヒンドリー (Hindley Earnshaw)、キャサリンの織り成す関係の中に、当時の奴隷制を巡る廃止論者、反廃止論者、そして英^{アングロ＝サクソン}人至上主義に基づく人種差別者による、三者三様の議論を読み取った上で、『嵐が丘』は、それまでアングロ＝サクソン系の人種しか存在しなかったワザリング・ハイツに、異なった人種の人間が入り込むことによって、腐敗していく様子を描いていると指摘している。そして、ジェントリー階級の住むイギリス本土の地所の象徴であり、植民地経済の利潤と無関係であるように見えるスラッシュクロス・グレンジもまた、次第に汚染されていく様子が否定的に描かれていると分析している。さらにスネイダーンは、ブロンテはヒースクリフとイザベラ (Isabella Linton) の雑婚に人種混交の脅威を表現しようとしていると考え、二人の間に生まれた、ひ弱で覇気のないリントン・ヒースクリフ (Linton Heathcliff) には、劣った混血児への人種的な差別を読み取ることができるとも主張している。スネイダーンは、確かに物語の最後で人種上の他者であるヒースクリフは排除されているように見えるが、小説が出版された1847年には既に過去のものとして、「死んで埋葬された」(187) と信じられていた奴隷制も、実はキャサリンとヒースクリフの魂を描写する結末のロックウッドのセリフが暗示するように、「落ち着かない仮眠」(WH, 334) に就いているだけであると論を結んでいる。

3. 『嵐が丘』の疑問を解く

では、こうしたポストコロニアル批評に基づいた先行研究を利用すると、本稿の第一章で取り上げたような、当初の疑問にどのような回答を与えることが可能になるのかへの試論へと進んでみよう。

3. 1. ロックウッドの語りが示すもの

これまでフェミニズム批評によって度々指摘されてきたことであるが、キャサリンによる父親、兄への反抗は、家父長制への反逆ととらえることが可能である。しかし、キャサリンは妻になり、母になるという新しい役割を担うことで、次第に家父長制に取り込まれ、閉じ込められていき、最後は死を迎える。ネリーが語ったことをロックウッドが綴る『嵐が丘』の語りの構造には、自らの声で個人史を語ることを許されない一女性としてのキャサリン、という構図が存在し、ブロンテによる、フェミニスト的な糾弾を垣間見ることができる。

ところが興味深いことに、同じ構図がネリーを巡っても構築されている。ネリーは、ロックウッドに対して、もしかすると、アーンショー家とリントン家の話を聞かせただけではなく、彼女自身の個人史も語っていた可能性がある。しかし、ロックウッドが自らの日記（旅行記）を綴るとき、ネリーの個人史を、取るに足らないつまらないものとして削除してしまったのかもしれない⁷⁾。すると、ここに、召使い（下層階級の者）として切り捨てられようとしているネリー像が浮かび上がる。ここには、ブロンテによる、マルクス主義的な糾弾を垣間見ることができる⁸⁾。

ここにさらにポストコロニアル批評を持ち込むと、この作品の二重の語りの構造の意義が見えてくる可能性がある。ロックウッドがその語りの中で、資本主義的、家父長制的社会の価値観に基づいて、ネリーの個人史を切り捨てる以前に、実のところ、ネリーも自らの語りの中で、一方で、ヴィクトリア朝的な価値観に基づいて、理想の女性像から逸脱したキャサリンの個人史を切り捨てているだけではなく、他方で、イギリス白人女性の大英帝国主義的な価値観に基づいて、ヒースクリフの個人史をも切り捨てている⁹⁾。フェミニズム批評で解釈したとき、キャサリンという女性が個人史を語ることを許されないことが強調されるように、ポストコロニアル批評で解釈すると、ヒースクリフという被植民者も個人史を語ることを許されていないことが浮かび上がる。下層階級のネリーの語りがそのままの形で読者に伝えられることはなく、アッパー・ミドル・クラスのロックウッドのフィルターを通して、彼から見て適切な部分のみが日記として綴られるという語りの構造は、実は、被植民者のヒースクリフの語りがそのままの形で聞き手ロックウッドに伝えられることはなく、イギリス白人女性ネリーのフィルターを通して大部分が削除されているに違いないことを読者に気づかせるための策略なのかもしれない。ネリーの語りを最も外側にせず、ネリーの語りをロックウッドの語りで囲わせて、敢えて語りの構造を複雑にすることで、『嵐が丘』の中で行われている二重の「弱者」の切り捨てが際立つように、この作品の語りは構成されているのかもしれない。

このように、ポストコロニアル批評に準拠すると、バーサ・メイソンの声が消された『ジェイン・エア』のジェインの一人称による語りの構造と同様に、被植民者のヒースクリフの個人史が排除された『嵐が丘』の語りの構造も、帝国主義的イデオロギーの存在を感じさせると主張することができるようになる。このことは、フェミニズム寄りのポストコロニアル批評によって『ジェイン・エア』を分析したスピヴァクが、シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë）は大英帝国のイデオロギーに与していたと批判したように、エミリー・ブロンテもまた、大英帝国のイデオロギーに与していたと批判することを可能にするということを意味するのだろうか。しかし、作者エミリー・ブロンテ自身が、植民者による、被植民者の個人史の排除を、支配者側

に立って肯定していたのか、あるいは被支配者側に立って否定していたのか、判断するのは困難である。本稿の第一章で触れたように、作者が関与してこないように思われる複雑な語りの構造は、こうした判断を保留するからである。

3. 2. 第二世代についての語りが示すもの

では、『嵐が丘』という小説が成立するために、キャサリン母娘の二世代にわたる物語が必要であった理由をポストコロニアル批評で探ってみるとどうなるだろうか。『嵐が丘』をフェミニズム批評で分析したギルバート (Sandra M. Gilbert) とグーバー (Susan Gubar) が、二世代のキャサリンとヘアトンの結び付きは、結局のところ、家父長制の復権を認めてしまっていると分析したのと似通った論理で、大英帝國的イデオロギーを賛美するためであった、という解釈が成り立つ可能性がある。

スラッシュクロス・グレンジとワザリング・ハイツは、第一世代の存命中、一旦は、植民地の元奴隷、あるいは奴隷との間の混血児として解釈されるヒースクリフの手に渡る。しかし、二世代のリントン家とアーンショー家の正統な子孫の結婚によって、ヒースクリフ (とその血を引く者) は、両家の家系図から完全に抹消されることになる。マイヤーの表現を借りれば、「リバーズ・インペリアルイズム」の象徴である異分子ヒースクリフの侵略は退けられ、両家が象徴するイギリス白人社会に平安が訪れるからである。

その一方で、前述のように、確かにヒースクリフの語りを操作したのはネリーではあるものの、双方とも自分の個人史を語ることを否定されているという点において、ネリーをヒースクリフに対峙する存在としてとらえるのではなく、下層階級のネリーに、語ることを許されない被植民者たちの姿を重ねることもまた可能である。そう認めた場合、そこから、さらにどのように『嵐が丘』論を広げることができるだろうか。

もし、ネリーは『ジェイン・エア』の召使いグレース・プール (Grace Poole) が雄弁に語る機会を与えられた姿であると想像することが許されるとすると¹⁰⁾、今度は、グレースがソーンフィールド・ホール (Thornfield Hall) で世話をしていた狂女バーサ・メイソンと、ネリーがスラッシュクロス・グレンジで世話をしていたキャサリン・アーンショーを重ねることが可能となる。個人史を語ることを許されていない一方で、ネリーとキャサリン (そしてヒースクリフ) は、グレースとバーサに比べれば、フェミニズム、マルクス主義、ポストコロニアル主義的発言をする機会を多く与えられている。となると、非白人女性の犠牲の上に成り立つイギリス白人中産階級女性ジェインの自己確立をハッピー・エンドと設定することで、大英帝国の帝国主義のイデオロギーに与していると批判される『ジェイン・エア』と比較すれば、『嵐が丘』は、反体制側への、より好意的な歩み寄りが見られる作品として評価されることも可能となるのではないか。

ロックウッドとネリーの二重の語りの必要性、そして二世代のキャサリンの人生を描く必要性の二つは、この作品を読み解くための問題点と考えられているものの、従来の精神分析批評やゴシック・ロマンスとしてのジャンル批評が導き出す回答だけでは、これまで完全には解き明かされてこなかった。しかし、ここにポストコロニアル批評のメスを入れると、一歩 (だけではあるが) 進んだ理解が可能となる。ポストコロニアル批評で『嵐が丘』を読み解くと、ネリーの声が消され、二世代のキャサリンとヘアトンが結ばれることにより、ヒースクリフがワザリング・

ハイツから排除される物語は、好むと好まざるとにかかわりなく、『ジェイン・エア』同様、大英帝国のイデオロギーを取り込んでしまっていることが分かるからである。

結びにかえて

もちろんこうした解釈はあくまでも試案でしかない。オースティン (Jane Austen) やシャーロット・ブロンテが、サイドの問題提起を契機として盛んになった『マンスフィールド・パーク』論や、スピヴァクの問題提起を契機として盛んになった『ジェイン・エア』論が主張するように、果たして帝国主義文化のイデオロギーを拡散しようとしていたのかどうか、結論を出すことが困難であるのと同様に、『嵐が丘』という作品が抱える諸問題に対して、ポストコロニアル批評に準拠して回答を与えてみることに有意性があるのかと問われれば、返答の仕様が無いのも確かである。しかし、本論文で示したように、サイドによる問題提起以降、英国小説に帝国主義文化のイデオロギーが見え隠れするという事実は今や明白な事実として認識されている以上、今後も帝国主義が十九世紀イギリスの言説に与えた影響について十分考慮した上で、『嵐が丘』と大英帝国の関係について、より詳しい研究がなされていくべきであることに疑問はないであろう。

注

- 1) ロマン派文学的要素とヴィクトリア朝文学的要素の二面性に関しては、パイケット (Lyn Pykett) を、文学ジャンルの混在性についてはアームストロング (Nancy Armstrong) を、そして二面性と語りの構造の関係についてはマシューズ (John T. Matthews) を参照されたい。
- 2) ラングマン (F. H. Langman) は、研究者たちが明確な回答を与えることができていない『嵐が丘』の難問とは、「文体と語りの構造」、「キャサリンとヒースクリフの愛の性質」、「邪悪な暴力と残忍性」の三つであると指摘している。
- 3) 例えば、ギルバート (Sandra M. Gilbert) とグーバー (Susan Gubar) はキャサリンの葛藤に、自然 (“nature”) と教養 (“culture”)、あるいは無垢 (“innocence”) と経験 (“experience”) の対立を読み取り、エドガーをキャサリンの「超自我」 (“superego,” 281) と、ヒースクリフをキャサリンの「イド (本能的衝動の源泉)」 (“id,” 281) と解釈している。そしてコンガー (Syndy McMillen Conger 409) は、エドガーとヒースクリフはキャサリン自身の社会的な欲求と感情的な欲求の対立を表象すると指摘している。
- 4) 早くはクリンゴピュロス (G. D. Klingopulos 132) が、キャサリンとヒースクリフの関係を「親族」、「兄妹」と見なす発言をしているが、リーヴィス (Q. D. Leavis 26) やソロモン (Eric Solomon) などは、ヒースクリフはアーンショー氏の隠し子であると考えて論を進めている。
- 5) ポストコロニアル批評で読む『マンスフィールド・パーク』については拙論「英国小説のキャノンと帝国——『マンスフィールド・パーク』の場合」(『日本女子大学英米文学研究』第47号、2012年3月発行予定) を、ポストコロニアル批評で読む『ジェイン・エア』については拙論「英国小説のキャノンと帝国——『ジェイン・エア』の場合」をそれぞれ参照されたい。
- 6) フェミニズム批評やマルクス主義批評による『ジェイン・エア』読解の限界についての指摘はスピヴァクを参照されたい。また、フェミニズム批評やマルクス主義批評による『嵐が丘』読解の限界についての指摘はミッチー (Elsie B. Michie 74-5) を参照されたい。
- 7) 召使いであるために「自伝」を語ることの許されないネリーの立場について、西成彦が分析しているので参照されたい。

- 8) マルクス主義批評による『嵐が丘』の読解はイーグルトン (Terry Eagleton) を参照されたい。
- 9) こうしたネリーの語りの操作こそが、ハフリー (James Hafley) によるネリー悪役説を登場させることになる。ハフリーは、ネリーは最初からキャサリンらに悪意を抱いて彼女たちの運命を狂わせようとした悪役であると主張している。ハフリーほど極端な結論には至っていないシュナミ (Gideon Shunami) も、理解力と判断力に欠けたネリーは、当初悪意はなかったものの、すべてが終わった後でロックウッドに物語を語る際に、自己正当化を行う目的で語りを操作しているために、語り手としては信頼できなくなっていると解釈している。
- 10) ネリーとグレースとの関係については西 (11-12) を参照されたい。

引用文献

- Armstrong, Nancy. "Emily Brontë In and Out of Her Time." *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 2. Ed. Eleanor McNees. Mountfield near Robertsbridge: Helm Information, 1996. 382-400.
- Austen, Jane. *Mansfield Park*. 1814. Ed. Kathryn Sutherland. London: Penguin, 1996.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Ed. Michael Mason. London: Penguin, 1996.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. 1847. Ed. Pauline Nestor. London: Penguin, 1995.
- Conger, Syndy McMillen. "The Reconstruction of the Gothic Feminine Ideal in Emily Brontë's *Wuthering Heights*." *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 2. Ed. Eleanor McNees. Mountfield near Robertsbridge: Helm Information, 1996. 401-417.
- Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. Anniversary Ed. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Hafley, James. "The Villain in *Wuthering Heights*." *Nineteenth-Century Fiction* 13.3 (1958): 199-215.
- Heywood, Christopher. "Yorkshire Slavery in *Wuthering Heights*." *The Review of English Studies* 38. 150 (1987): 184-198.
- Klingopulos, G. D. "The Novel as Dramatic Poem: *Wuthering Heights*." *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 2. Ed. Eleanor McNees. Mountfield near Robertsbridge: Helm Information, 1996. 127-144.
- Langman, F. H. "*Wuthering Heights*." *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 2. Ed. Eleanor McNees. Mountfield near Robertsbridge: Helm Information, 1996. 313-327.
- Leavis, Q. D. "A Fresh Approach to *Wuthering Heights*." *Emily Brontë: Wuthering Heights*. Ed. Patsy Stoneman. New Casebooks Series. Basingstoke: Macmillan, 1993. 24-38.
- Matthews, John T. "Framing in *Wuthering Heights*." *Emily Brontë: Wuthering Heights*. Ed. Patsy Stoneman. New Casebooks Series. Basingstoke: Macmillan, 1993. 54-73.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Michie, Elsie B. *Outside the Pale: Cultural Exclusion, Gender Difference, and the Victorian Woman Writer*. Ithaca: Cornell UP, 1993.
- 西成彦「エレン・ディーンの亡霊」(『思想』897号、岩波書店、1999年3月、4～20頁)
- Pykett, Lyn. *Emily Brontë*. Women Writers Series. Savage, Maryland: Barnes & Noble, 1989.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. 1993. London: Vintage, 1994.
- . *Orientalism*. 1978. New York: Penguin, 1995.
- 坂田薫子「英国小説のキャノンと帝国—『ジェイン・エア』の場合」(『イギリス文学のランドマーク』、大阪教育図書、2011年11月、31～40頁)

- Shunami, Gideon. "The Unreliable Narrator in *Wuthering Heights*." *Nineteenth-Century Fiction* 27.4 (1973): 449-468.
- Sneidern, Maja-Lisa von. "*Wuthering Heights* and the Liverpool Slave Trade." *ELH* 62.1 (1995): 171-196.
- Solomon, Eric. "The Incest Theme in *Wuthering Heights*." *Nineteenth-Century Fiction* 14.1 (1959): 80-83.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Three Women's Texts and a Critique of Imperialism." *Critical Inquiry* 12.1 (1985): 243-261.